

ジャワ農村における相互扶助慣行
—シンパン・ピンジャム (Simpan Pinjam) を中心に—

相山女学園大学 黒柳 晴夫

ジャワ農村の稻作農業は全体的に生産基盤が脆弱で生活水準も低いため、ジャワ農民は互いに農業生産や生活を補完するためにさまざまな相互扶助の組織化を図ったきた。このような相互扶助慣行はゴトン・ロヨン (gotong royong) と呼ばれ、農村と都市とを問わずインドネシアで広くおこなわれている。ジャワの人々は、ルクン (rukun) という社会的融和の価値を重んじ、できるだけ自己の感情を抑制して他者との調和を大切にするため、ゴトン・ヨロンへの参加を重視する。

それは、ジャワの人々にとって、ゴトン・ヨロンへの参加が周りの人びとの同調を表すものであるとともに、ゴトン・ヨロンによる物とサービスの提供が決して一方向的なものでなく、やがて自分に回帰してくることが期待される互酬的な関係として理解されているからである。

ゴトン・ヨロンは、基本的に労働力や物品あるいは金品の直接的な授受による相互扶助慣行である。しかし、農業の商業化や商品経済化が進むにつれて、農業生産や日常生活に必要な現金を融通し合うための庶民金融を目的とした相互扶助の新しい組織化がみられるようになってきた。

このような現金を融通し合うための相互扶助組織として、すでに 1960 年代からジャワ農村に普及してきたのがアリサン (arisan) である。これは、さしづめ日本の「頼母子」や「無尽」に相当するものである。

ところが 1980 年代からジャワ農村では、アリサンに比べて商品経済の進展により適合的なシンパン・ピンジャムと呼ばれる新たなクレディット・システムの組織化が急速に広がってきた。

Simpanは貯金、Pinjamは借金を意味するインドネシア語である。

詳細については、中部ジャワ南部のヨグヤカルタ特別区内の稻作農村の事例を取り上げて報告する。